塩尻　十九

太政官文庫
和書門
二一四九七號
一の一函
二架
六五冊

内閣文庫
和書類
二一四九七號
六五冊
二二函
三一架

内閣文庫
番號 和 11497
冊數 65 (19)
函號 211 302

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite
国立公文書館
National Archives of Japan

流水清濁在其源也猶源濁而望水清理可得乎 貞観

源清濁の様なれば流れて清冷なるべきされば君不善にして臣民の善ならんことを欲すれども豈うべきひや上の好むところ後なりて其令をも下にはおこなひ難き志てさかひ侍りんや大学の教其事詳なり也

治國者必有法制号令以禁民為非而律民以善雖桀紂之世亦所必有但其所好則不若此故民不從其所令云云 仁山金氏ノ説

掩涙別郷里飄々將遠行茫々緑野中春尽孤客

情驅馬上丘隴高低路不平風吹棠梨花啼鳥

時一声古墓何代人不知姓与名化作路傍土年々

春草生感彼忽自悟今我何營々 白氏文集二續古詩

此うた給を慈恵和尚の本にて清すれぬ名とあふ

さりぬ昔の古にはいくたび草はらとひかりけん啼鳥

もろかれぬの声をきゝに諸りし功徳聚 率都婆の訳語也

だゆ年ゝにうきよ人かれ類をなをあはれなく文字

ミへきへて路行人のすさみにかゝる行月はなそて社

わびさかれさりまりけれ春草生ろ句をみて思世

憐すそしるあしむの哉ふ偏さしくまの前にも筆の

そて猶たり給ときゝへぬ心とそうしてつきかられ

衣一兩 韻會ニ兩匹也 左傳ニ重錦三十兩ト註ニ二

丈双行故ニ曰兩ト三十匹也

弘決ニ云西方風俗稱名爲尊此方風俗避名爲敬 云云

抱朴子曰何異以一尋之綆汲百仞之深不覺所用之

短而云井之無氷云云

○風俗通云愁眉者細而曲折啼粧者薄拭目下若啼處墮馬髻者側在一邊折腰歩者足不在躰下齲歯者若歯痛不忻々

これ後漢の梁冀か妻孫寿といひし美婦この人のはしめしを時の人是を婦と称し帝京の婦人みなこの治容にならひしとや嗚呼愁眉といひ啼粧といひ墮馬髻なとめつらしきかたちを好み其よそひ甚他にかはりぬるをよしとこそしれ杜帝か媚

惑のけやけきもの病ありしに時の婦人これをまねてまねひて粉粧し髪をつくり身をかさりおのれを美へ教とも天下をしらす是はいたらぬ男女をも愚かに思ひしかはすや我国近世京師都会の娼女等髪のかたちなとしも頭の中にゆひ或は紫帽子を蒙することしはやらせしを後家のあるものより起り下賤女まてもみな是をまなひて学ひやさしき人思ひしをやうやく世にひろまりて京東の人時勢の治容

此し見とりしもかりて旅人に語りしはなかし
二十年のむかしハさる楽師の女なるを擬ひ給の
きしくしけとこましてましくほとこるの方係伯稽の
はく粧ひ侍るもやすらて衣服のよそほひ二十年
のうちさ海くやへ人のよりすこしのちなるを殺
ぞやとみえかくふも綵風雲のありてまた新
しくよそひて人を惑し侍るとも見ゆる
らすいかにしてあかしかさねきまりん塚の

うらふしすゆめ計りまて女はすへて粧の媚をのくるなり
つ里華も夷も花柳の巷の郭に娼婦とかくし並
て賣り侍るを吏跡よりくく進ひ合せしも京
師よりかよひ侍りしくいつまりり侍るなりしも登見三月
東都にして娼妨の旅屋の郭に娼女とこそしくく
いはれしあはれしよりや五年雛波より入しれぬ品
○おかくし来し女は楼に海に出しかくみとよる
○京信して色は見きれいとも好しれてしいこをの

よまへ侍りぬ

○伊勢の子良館侍の務は月のさはりなき女なり處侍の内侍は年老までも仕へ侍るにや伏見の桂嫁は代々同じ其職を傳へて神功皇后の霊に奉祀すされば嫁は家主にて其夫は家司のごとし男子生ずれば他へ養ひ女子生れぬればやがて家を継しめ侍るとぞかやうに東都にも来り諸家へも出入す綿にて製せる帽といふをいたゞき侍へりよし神功皇后三韓御征伐の時服し給ひまゐらせし御冑を学びたるとや

○紀州那智の比丘尼は皆山伏を夫として法別歌国とめぐり勧進とすれど近くは絶て其業体を変く殊に東都色を賣る比丘尼数子今はなかで多く作料をおくりなりたる一山富て豊かなり一体なりけれ熊野比丘尼とて昔は所々に勧進しければいつしか遊女と似て同じ名を専らにすなきもいはぬに似けなし

○伊勢上人善光寺上人熊野上人といへるも比丘尼

あり伊勢に慶光院上人ハ禅家にして紫衣勅許
善光寺ハ浄土宗にして香衣勅許なり是等ハ共
に清尼にして那智のものとは異り其中善光寺の皆
尼ハ小集寂庵尼多くは不義の女刑に可処べき身の
ゆるされて全くハ主家を羅浅逸して佛衣を被
る者の一つまりに髪を剃て尼となりし尼のこともあるよし
や鎌倉の比丘尼所も亦或ハかゝる風俗ありしと云ふ
ふ是こそあれかへしに本国へ帰る

伊勢神領四万二千百五十石余 春日社領二万千百
十九石五斗 石清水領六千七百五十七石 加茂社上下二千
七百石余 鴨社下 五百四十一石 住吉二千百十六石 吉野
千十石等凡そ畿内の神社寺院多く常例参
詣の領二千石 山内三百石 大宮司百三十石 神宮寺別当三百石 残其他社人分配せり
下総国香取神領千石 駿河富士領千六百十九石
余三百石大宮司百五十石 宝幢院五百石
新宮家百五十石百八十石 諸神人配当しと云 信州
戸隠山上諏訪各千石 下ノ諏訪五百石 雲州大社五千石 豊前

宇佐千石等諸國の神領数へしらかあれハ

○日光山一万二千六百石輪王寺のミ紀州高野山二萬石伯州大山三千石又百石大山寺学頭出羽國立石寺宝珠山阿闍院千四百二十石天台同國嚴上感乾院七百八十九石真言同國山形光明寺千七百六十石時宗かくのことくいふ猶多し光明寺ハ梅家使将軍修理大夫兼頼本領ノ地兼頼ハ最上家之祖也況や摂州天王寺和州法隆寺等の勝區山門三井およひ大山等の寺産知恩増上以下の蓮社其領

亦我詩〻や世の風俗よりして儒士をして誅る愚

○二俗おこりて此の貴へとすあ人をめて徳を[illegible]して賛しなく偏に無位の邪人時をめてへて大禄をと食華ハ又國家の貴かるへかりしを何をかや

○神名或加賀國石川郡白山比咩神社梅あるふ白山今越前國に属す故に白山寺ハ聖院二百石を領せるしかれとも加賀國白山ミヲヤマ領七十四石なる故ト加越両國ともの山をまつひ訟ひあひ

しゝ改なしし今ハ両国の主の主維となれり
関東ハ北ハ海浩かりしやれて平泉寺 越前 白山寺
加賀 須原等人名白山ハ我山なりとおりたり
越知山大谷寺 領百石 ハ越前の国之泰澄師開祖の
地なり白山の神を祭り始しもの師のして其異ハ
のせて之を事秋も等にミへぬり

○二條の第 行幸 寛永三年九月六日 前一日 九月五日 儲御所大殿祭
祭主神祇権少副大中臣朝臣友忠勤仕

主殿寮供常燈 木工寮結燈臺調進
○掃部寮設ハ半畳薦等
中宮少進藤原長信 藤原親次
此二人ハ武士也長信ハ天野豊前守親次ハ大橋越後守
○将衣 紋紗 下襲 唐紋 指貫 同
○御随身六人 武家也
冠 如常 褐 鶴紋 紗縫物 衣 唐綾 雁金有裏 蘿蔥 薄紋
袖 草 赤地金襴 附大唯 袴 唐綾 石帯 絲鞋

凡て供奉公卿以下皆一日晴装束之尋常の服にて
異なる事なかりし
○倭歌御会の御時　大相国御直衣 杉葉回紋 鶴菱
御指貫萌黄唐織物 丁子丸
将軍家御直衣 紅浮紋鶴菱　御指貫 紫唐織物 丁子ノ丸
摂家或ハ蘇芳或黄織色等の御直衣なりし
○倭歌の御会事終りて御遊 百餘歳中絶依別勅四辻中納言季継卿再興と云々
調子 平調　伊勢海　拍子楽子継

催馬楽
萬歳楽　林歌 残楽　朗詠 徳ハ足　太平楽急
夜半楽　朗詠 嘉辰　慶徳
催馬楽の御箏ハ御所作なりしと云
寛永行幸の記とて梓せしは南禅寺僧録司円照本光国師崇の筆紀にして一巻なり
○和州当麻の曼荼羅ハ孝謙女帝の天平宝字七年の六月廿三日出現すと云　近年黄檗山万福禅寺四世　独湛瑩禅師
来朝の後此の曼荼羅をうつしていさゝか縫こしらへ執

大曼荼羅なりとて悦峯和尚（今万福寺住なり）として一幅を
写し圖せしめ元禄十四年辛巳清朝に賜はりし彼
の國諸山主これを得て使命してこれを梓に彫らし
め天下に流布せしむ且浙杭東林の盤譚禅師
に其記を筆せしめ乃く雲樓蓮池大師の塔前に獨
存しけるとぞさても雲栖出現の後の今二十七年にあ
たりて漢異郷に傳へ今盛京江寧これを諸備
に流布せし然し亦々因縁時ありといふべきかな

○盲者の傳に光孝天皇の皇子雨夜皇子明を失ひ給ひし
ませし時に世の衆盲を憐み田を置て無頼の盲人を
恵み給ひし也（いまもむかし上加茂封境の地其田有しとぞ）又盛衰記に（黒谷上人九巻傳等の説）光孝
帝の姫宮玉刹加陵風芳しくおはしけり是江口神崎
室兵庫等遊君の濫觴なり或ハ八人の皇女とも
道に遣し衣の名を留めしと傳ふ梅花抄に光孝帝に
かれ給ふ御衣の皇子坐しましけれども當時天皇孤獨の
窮民を憐み所々に田を与へて恵み給ひしと後世あ

やまりて皇子の作者なりといふ伝へ侍るか蝉丸とて延
喜帝の皇子といひ又乞食の祖ともいふ乃類か是にも
亦逢坂に雅留をむすひ無我を養ひ玉ひしより
かく伝へ侍るなるにや

○今茲癸巳武州熊谷村江戸より七里余甲州道の辺といふの民長兵衛子長兵衛 十六歳
の者太神宮の神異といふ頃は未信となかりし東都の人日
日々に供する祈願の年月なるにもしや是も亦疱神湧の
○類ひなるあやしき事也

願ふ五人の白布計り幅八寸閏五月の頃
い幡揚百流立しとうかかさりしや

○或人問錦の直垂は武将の服く然るを近世其制服
とかはりたるか何と答ふまれいはく主将将軍の定服なり尤
練絹の文字を書せり畑緑に曰上古は将と袖すなわち
時の服と賜りて其国へ行なるとなり此の服を着る
武士異にやすれくもなれ失なかし麾く時は今に應
す錦と用裏は柳葉薄衣の板の物のなる也
長は類義記に二尺五寸但し人によるへし袖の広は

一丈六寸筆ハ早印伝へて其製を得今軍家者流多
くハ十五札を用ひ附合の新製をも以て誰もあるも
嗚呼の事歟

○金剛草履といふハ菅にて作りて爲取伝へに五大院の
安然和尚いとく貧しかりけれハ草履を造りていとなみ
とかくにせられし人来りて是れを何かといひて問へハ金
剛の性体と答へられしとや今も修験者の道
にて菅の草履を金剛といふ金剛坂の地名も是
より起れりとぞ又昔ハ僧家者流の用ひしものと聞
えしハ尻切ハ裏に革を用ひ又別物なりといへり
かくいふ責念の爲にハ盧国の像と金屑者楪噌
る形を安する祝のこれをとり用ひて己が業の禮とするの胡乱
の所以なりと見りて我国草履流布の祖ハ安然
和尚にや聞えたるとして胡盧せり

○料簡 料簡を間と書は令（俗なりや） 後漢書に出たり料理の浅
深を料り是義の勝劣を簡といふ通鑑集覧に料ハ

度阿選かんしはかり

○一遍上人二河白道の心をよみ給ふ歌

西へ行道ハすくなる河の両ハなかれつゝもかくハたゝいなかれん

南よもりひくおかつゝかくてもはしふてはてんわかへ

右あらかれの細路なり海しそかゝつゝもかくてもたゝ

かくいなちすへるれいしたらかねかんにて發遣の

声小まつせ來迎のたのもつよくけふかひくし

二河をうへりうすおつて給んの事海をゆくらかく縁

しゆまていまんれとくあまかくすや

○癸巳閏五月十二日府下廿七高家林木町天満や九兵衛古井ニ貝殿

多く座敷低いまし埋し梅田の晴る故男たいまして茶の

汗つみ多なとかへりさすき入いりてやくへしく不出又二人

の男怠りしなかりて井に入り出是を示一の得手の歌

肉の香しくもおしと後とふいら井にかりて呼来つて

はよさしれ古年に井よ入ぬ品ハ先清水をおたく汲入く

後下宜飯しらてお身めて此へ入られし宮々て命何かあて

去て水なき井へ入まくて井の中へ入せしに其まゝ死てい
また一人そのかなしみにたへかね入けるに是も又同く入て死す後に
下りける二人ともに井の上にて引上しかと死けり 先に入しハ廿四五の
男井なりしをやうて死する後に入たりしハ 仲なる男
五十歳ばかり井中にて即時に死せしとぞ 仲なるも同じく侍る
なるしかれはいかなる故にかくのことく侍れるやと尋ねしに
或人の物語りし侍る事あり古き井ハ久しく用ひぬ
故に毒気ありて人を害せしハいはんや汚塵穢芥の埋
もれ積りて気のつまりたる古井の中ハ毒あらんや井かへの日

塵芥多く埋し古井ハ必其毒を知るへし 容易に
入へからす先冷水多く入まいて其毒を殺して後に
下るへし是も又猫狗の類をつなき下して
凶ニ吉き井多くハ毒気あるへしと知るへし鶏
の羽を投せまわして落るは毒なし中に止れは
止まりて落るを待かは必水毒ありて人をそこなふ
ともかくもしの文なきにも侍るなり
酉陽雑俎にや背井へ猫子をおろしてこころみ当へし

いまはその毒気にあてられて立なから死しけれとかや
とてありし者まても死せしとていつ同日の譚とも云へし
近ころ肥州長崎の港に泊りたりし外夷の船（蛮）
梅雨のころ積深に所の者船中に入て多く死せし
の船底のふかさ九二三尺（みしかりあらんとそ）ところやれ其夏月物室塞て
世なく來なく湿温熱して塵埃を蒸し毒気生し
人物をそこなふこと理の自然なる事すくなからすあるへからす
事にこそ

○或人富士山の詩作りてさせしを和して贈りし詩
嵯峨土岳巍容々　朝鏡同霞照雪峯
神仙織為龍錦彩　儼然遙海古仙蹤

○孔子盗泉を不飲　呉氏貪泉を飲し其趣異なれと
もに清き川なる其人清からさるや　（盗泉ハ尸子ニ出　貪泉ハ晋書ニ有）　并州の妬
泉ハ婦女の粧を隔てしに日南の温泉ハ男女の人をえらハ
もしましと　（拾遺　作筆）　梁州の廉泉譲水こそ名もゆかしけれ

○我朝弘法大師諸国加水なき地に錫を卓て涌泉せしむ

○と異邦にても同しき事侍り。梁の景太禅師、羅浮の宝
積寺に居れり。其徒水なきを愁へしかは、師錫を地に卓
立、地泉水湧出す。これを人これより井浅侍りし山中今
に至りてこれを頼みとしいへり。

○遠州秋葉山の下乾の東南鐘撞といふ地、当時霊宮よ
りみて天野安藝守景泰にてはにし鐘をかけて忽
と告し所とや。乾より東北二里餘、家多村の内篠山
○是まつ中世天野安藝守の城地とかや。其地今に天野氏の住

ありしといふ

氣多村に和田氏何ありしに天野氏か氏族にて代々
住せりなり。多年中将忠泰に仕へし天野安藝守同氏
族なりし。今は此里に何かなる和田か東史青天野備の
此ことしは武田文幾ある利長に仕へし十余文字を天野
三左衛門と称せり

秋葉禅寺常に僧六七十口住す。毎年結衆より権現に
坊 忽納めまいらする刀劔凡そ千柄に及ひぬ。二月十五日、十月

られしもおそろし高家より出し世に秋葉の来地とよ
ことなり権現の祭ハ十一月十六日七十末の神供を献ず
貞享二年三尺坊とて駿河へ参りしもあらた
春のころ田畑祈祷のためしく村民私に幣をそなへ
涌して老若男女集り踊りかけせし陣持見聞の
老我方にもかくすつとして甚幣にも請得へし
まつうらかたよりぬくに随て秋葉踊として専ら
ありてはやせし後ハ山梨村掛川領の富民好者の者

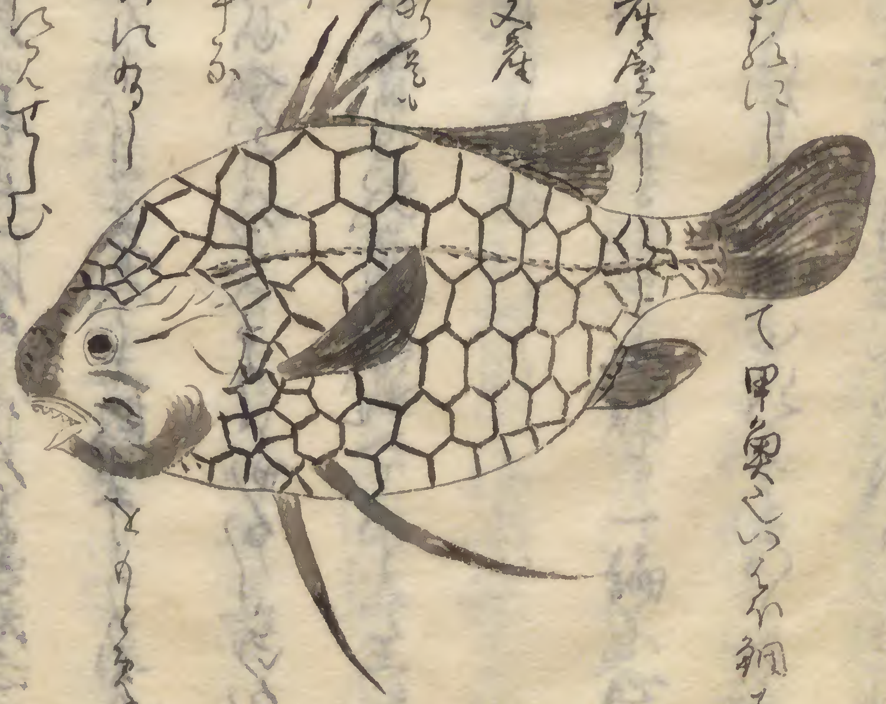
さ渡くにハ此よりはなかりし東西へおくり出せしより駿
河参りありて行われし山梨の民後不と遊ふよし其神をまつりたる所本宮ま
といまありてはやし大小あまり行きし掛川坂の下にいたる
ほりし時ハ三千人餘供せしとや遂に渡り掛川城ありて帰
出しも信加ある清まて登ほり鍬神と同じくなる
イフセ万葉に馬声蜂音とかけるハ物の不好なるをいふとなり
悒憤の字或ハ不審の字と書ハいとかつかなる心にて源氏
の明石の巻に氣のくれしもあるなりといふ本文にかなへりといへり

まゝと桐つほはしめよせれといへるを関屋に古き縁りしたるなれする
ともに賢木の掛におもひたまへんとをかしくもあかし
とちらくまに古き縁がかれともすれとも細に一編に心得
てはあるぬ本あまたなうつし

○石流とはさすかと訓たり晋の孫楚隠居せんとて王済に
いへ人およう石に枕し流に漱かんといふへきを誤りて
石に口すゝかん流に枕せんといひたれは王済いはく流に枕
しすへくもなし石に口すゝかんやといひけれは孫楚

と巧にして流に枕するは其耳をあらはんため石に口す
すゝくは其歯を礪かんとすと答へし故事よりおこれる
ならしれとを石流といへるはおほつかなし まことに曲かるよ
みけて一編かはぬことをよまするなるへし トケテ テモシ

○夷鯛（エビスダイ）或麦鯛（イワシダイ）石鯛（イシダイ）

東海に在り陸奥出羽も海中のあらにし  て甲冑といふ名 鯛石鯛

の名を聞きわれよろ人東国産なり

置て邪気をはらふ物とし文庫

神の棚にも供へ侍るなり

かしこき祝ありける

金頭と甲冑と一種のものなる

ありと云己国にて布白れあし

て以る字して好事にてんすむ

○鳴弦の抄に甲乙山鬼明王と書しなり云々や一説に曰是も

蟇目世射ものに者流のすぢなる 駿府浦の沖人安部氏 傳我先府下の士傳来せり 甚

符字に書しあるやうなれど府下東の稿に藏任諭法親王相

承有筆の天刑星の秘符に 大

山𤢖尻

の字なりひ魍魎なる字なれど是も筆や擬する字両界の曼

荼羅筆に加し不動明王ならめや尻との字をかく也

○あや

○太平記ニ小猿楽ハ佳例延年の法ありし或ハ延年の舞と
て、猿楽のしたる最初ニありしなとよばれ悪鬼魔障
を猿一術よりや如何なる業かやしと日りたれと露排にと
こと小圓光大師の行状ニ後白河法皇如法経の御時山門の
て延年缽のさ猿楽なりしとぞ云々 其翼ハ讃へ九 日ク大
極此場方三十間計芝をしめて縁とし藁佐等の者甲
兵を帯し異形の小童ニ麻札をわらせ来て腰ありとも
○て延法とて圖むかしに傍衣弟の名児となし八日其申出米示

ともに年ニ一度延年をなしてお祭申すよし
走催 床排 会議 披露 假屋楽 中間舎 乱舞
等ありて遊僧ともいふべくの僧衆をも法師の芸業に
○東輪 韓神 児童の業とも
○朗詠 白拍子 開口 當弁 伽陀 連事 児催ニなす
風流 大頭 相乱拍子 延出楽
○今も南都の薬師寺の僧侶伝へていづこめでも催ありと云
寺僧併て流しむといふ云々むかしは貴人の家にして所々ありし

也や東鑑に嘉元五年正月五日御門前の酒宴にありて延年
等ありしとかやせり是ハ人の敬楽にして今此楽猿是
よりいでたりといふ是相当の時に定り侍るなるや
○或人問秋寛ハ秋策に同しとやすれば答に然り此ゆへにて
輕重ありて秋寛ハ柱撃とこそいふべし秋策ハ蘋藻を
かけてすれば顕達の正義の辯辞し
問祈年ハ迎へて年穀の豊登を祈るに倭漢通例なり
其他田峯等の祈ありや答月令に孟冬に祈麥の

祀ありて孟春に祈年の禮あり祭祀の禮天子の人にとへて氏
に仁すれば出て穀食の豊ならん事を神祇に祈禱し
自然に道修せ一己の徳をなして祈ありかしかれや况や
妖巫利のためにするはつゝしむさとや
○癸巳文月より南都に春日御社に詣けり頃まかせねしまえて
春同遊の来縁群とめし侍る下旬の頃天満宮の
系よりの来縁に往て拝しまいらせ両殿の縁り侍りに申せし
たる所縁して
の御殿北方西の御殿南方のかみに上へす常も此両殿ハ

の御殿御簾中の縁のたれ帽額よりはしめてまはりて
赤色の物をつけさせ侍しまはして忽然の御かりさ
侍まて人々おほく参じ若宮殿かたへおはし黄色を
○こへく大宗のよりは小さし此假面ハ御簾の内より出
給しやうにうかゝい入まし
真福寺の衆徒およひ神主の家以下の神人まて
ことの事ハ云れ承をハ人の問ハんに答へすして是様の
問ハ悲しみ多く給ふや一紀希異の珍事なり

○鉢ハ梵土の食器なりこれに三種あり石鉢ハ佛器之
鉄鉢ハ僧器本鉢ハ外道の飯器なり釈氏の書に
見へたり是ハ天竺の風俗として時にしたかひて我
随應の器なりこれを捨て是非西土の風を用ひ
かんと思ひしかまたしかハきかなりとも像へけり
○佛像の手ハ五彩の糸をつけて天竺のならひ佛像
の左手ハ五色の幡をとりけ終焉に臨める人の左手にハ幡
の脚をとらせ 四分律鈔 文殊教 灌頂經説の中に佛殺の弟

にかけて行者の手にとらせて念じつゝ半行もしはなか
めり臨終に行の五色の糸とも云へり結縁のため仏に所願を求
てあるゝ中対して念ずる縁の縄時の吸縄
とりつけて引き南都薬師寺の景戒法師所述の霊
異記に載ありされは仏力の大縁讃を結び引摂の文
悲あまねく意也 往生要集に（註にみえたり）今世霊像の因性縁と
に縁のすじに糸をかけ大に渉さる白布綱長くのばして
極楽の聖衆下に降らせたまふ其の綱をかけて

逆縁ともむすひて善縁なる義なるらん
○越国大神（タイジン）に白紙の時神輿に紅の長細綱二條を
つけて尾張氏人ども神人わけてつなぎ引奉る在鎮
の神事ありこれを等しくひのこ法なりと称す 日の御綱或は綿の御綱
いおおいとぞ
○万葉集に人麿の墓に率都婆を立てて書付ける
清輔朝臣
世の中ぞすてゝもあるべき苔の下にしたはせられ

おかし墓所侍るに有なり梅宮明神にまうでゝよまれ侍るなり

山のまゆぬさこそ手向ても殊すゝ神ならぬかるものなりと（寂蓮法師）論しや

○まとあり人丸明神の事何故に祠并都婆立しは墓所

里内并別区とまうへあり

○ヲホロケ

小縁 墻扆等にうくと書せり 無明 白氏文集此字を訓す 源氏末摘花 おほろけなと

○うちつけなりしそよいは大方なりしそとおほろけなる小石字とまうへ

○イカケ

○沃 源氏ノ榎柱 沃ハ音屋 溉灌也 字彙ソゝクト読り

沃懸の御地等

桜まれに湯水をそゝぎて清めしかイカケといふ一書に

又沃懸地の太刀と蒔絵太刀かはりたりとありされとイカケ

とはすへて物我まれかなるをいふなりや源氏に床とあり

つけし我いふ付書きなり身しいふ付なるなりとみへたりか

かの湯なとは垢水なとそゝく一編に心得侍るへきなり

にやあるらん

○結構 むすふかまへ巧ヲ 霊光殿賦 観其結構規矩應天云云

〇一丱子綜の摠の字並倭訓なり

〇相州賀茂郡走湯山 俗に伊豆の御山といふ 箱根山より南海なる

しおのおもて山なりて山中温湯湧あり役小角開発すと

いや祭神ハ鏡速日命と聞へと世俗ハ走湯権現といふ 鎌倉右府

實朝の歌に

伊豆の國山の南に出る湯のはやきハ神のしるし成けり

玉葉二十神祇にあらへあり

〇神祠前獅子などを置 丝り 墨莉支家 朝鮮 天竺 獬豸 などいふ 置

用武の地 鏡鏡 罰ハ属 など 盃碑頭 贔屓を造り 西覇下

好重 を鐘上の組として 狻猊を佛座に作り 好ス坐 椎

すり戦

行を獄舎の門に 盃睚眦 を刀上に彫 龍の勾を 囚牢に

胡琴 琵琶の上に刻し 嘲風 好険 殿角に造り 蚩吻 好呑

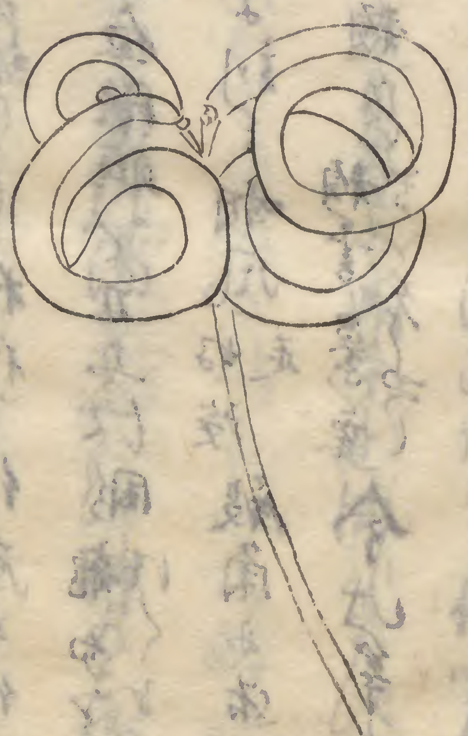
を殿脊におく 類多し 類書纂要 など考ふへし 今此等の類を

不知して一に獅子なりとおもへるハつたなくよく辨すへく

〇小角豆に大概三種あり 長きと短きと 莢なり短きと 此ら種又一種ありと

ふ豇豆 俗にさゝげ 或ハ緑さゝげとよぶ

圖ノかふし



○是貞日記跋

桑蓬四方よ射るハ男兒の遠志とするや實よ難と

万里の風よ着懐と九霄の雲よ遊ぶるその丈夫の意なり

おもむきやさしき波よ臨んで見れバ感傷の情なきにしも非ず

某ハ潚東の人壬辰のとし冨翁よりあらひ我蓬戸よ

來れりされバ凍雲武陵の曉よまとひて行く荒

村野店の霜はおのづからおもひしもなきしはかりの夜ハ長

経短亭に月をおくりてなつかしきなるの恨をもうらむ

玉笥箱根路をこえては沖の小嶋の古城今もありまさに駿
河の海にそうては富士の根の雪をかつきてなかめへの山並
の端にかけりて雲のかゝりしの影に隠て分れ
清見潟の浪をまつに眼も緑の松にへのかわるくもはや
おもしろくあらぬ外もなし中へさりける塒にし宇津の山のほと
あれはよ清く見ゆるまさに風は我ましかはし誠思ひ満ちの橋
極まりて瑠璃の光を目にも接て四
極二十日あまりにし府中流江縣にいそきやうそち

境ふれしむかし住なれし佳東都にゆきしことつゝ
此晩に六度あまりのおもひ出なきにしもかなしくもあらて
こし春秋のかはりゆくにも武陵に入りて甚洞林の
の花のくれはまたしもなつかしく見渡れは清かにみなしきなきそ
さゝ冷庵の細月にてしもして襟懐を金吹に拂ひいつもる
玉露をしたひて巷の庵に萩の葉の一音に書付侍る

柳辺蛍去緑窓幽　芦荻声軽雨庭秋

千里江山一筒字　詞々筆底是風流

ことしの露は叶ひて秋まつ露にしほれし松かえの林の風そしらるゝらむ

七夕前一日　轂　樟翁

○毋なき人に十とせあまりみまかり侍りしにかなしみて月影を描き給ふ　妙心寺

座中にて
和尚筆

印に接けれはうつし残る仕まいらせ世ゆゑ侍らんとしとれ

仙子　信景

あはれさらやそし行水のたえやらぬ瀬に袖ぬらしせかせて新涙を

帰らぬ人の萩の花咲けるそのゆかに　辰子

秋風の吹く白露やうつろひし袂の中のなみたなるらむ　成多哉

うかむへし

今はまたやよ嵯峨の秋の風にしてこたへぬ袖のしくれなる

学友提要子とし〳〵ひ侍りて猶しわか性生の瑞夢を蔵し正念に住けて終り残るを見けるに我聞て亦はなはた但信を凝しての来残る常に思ひ出ても〳〵めくりの仏なる

とて

寂寞北窓梧葉露　終焉入定嘉名芳

秋風夢覚見何佛　孝子哀情何日忘

とおさて影前にさしをきし時はなかれおちてまさりて候

露晴池氷白蓮潔　風静園林金桂芳

序杖之誰是主　北堂庭訓宜能志

彼の往生の上旬紙紀し侍りし、徳無山上人の遺し留

て難波の菓子あるは大徳とてこれ法号 往生の侍集

物せられしかはおくる千世にも伝へし両界結縁せさせ

をんとふへきよしを中にもまうされし先達へやうやく

御七忌し辰なり（七月十一）とむく人香花侍るとて血涙をながし侍る

○維

正徳三年歳次癸巳秋七月丙午朔越

十八日癸亥　孤子　信景

敢昭告於

顕妣淑室孺人藤氏尊霊　嗚呼哀哉尊霊奄忽

西邁　孤子　空残隻影於涼

窓素月呼叫無望皇々雲噎日月不居遽至初

七忌之辰昊天罔極血涙五内分崩嗚呼哀哉不[illegible]

五十餘年恩恵之高則士嶽猶如賤垤迹二六時
中慈愛之深則東海却似盈池　孤子孝養不少豈
千萬分之一唯恐酢四詞罪苦而不奈何酬報無地
徒號哭
霊位前而已伏冀
尊霊以慈眼遥視　孤子微哀　哀聴罪薛如常儼
鳴呼
衆僧晨朝礼讃引声念仏志切なるく唱へられけるも

あはれまりて参詣結縁の道俗持て志おほきうちにも
ありぬ
あはれの風吹よふ袖をしぐる声もまたさすかぬ月のかな

挽詞

慈室大虚盡天年　但信平生金鐵堅
夢裏佛身光照瑞　彩雲秋霽迓霊前
　　　　　沙門點之

和

古井氷開八十歳　一心金石是清堅

残名月下人何去　露白風軽玉案前

弔詞

星霜八十脱虚幼　佛寿業成夢亦真
何慟清風明月裏　金蓮歩々還家身

和　　　張門遺之

黯然笑語空成眠　追夢別魂泣向真
遮莫婆婆ノ般楽　花見堂快坐本来身

悼祖母淑室孺人　　外孫　源武慈

天不憖遺一老身　丹旐露重比邱塵
傷心何日謝慈蔭　空對秋容涙濕巾

和

風上誰憑朝露身　空園今日訪遺塵
巫山月落夢離夢　暮雨朝雲愁満巾

。北堂は秋のいまは松むしのなく音さへすゝきのゝゆめにしてつゆの庭
けふ女童おくりの里のゆめよりてさしやうおとの篭の人ゝすまふ
すゝ[illegible]ゆめて[illegible]志[illegible]小園の放

ちかくれたりしつ苔むして雲かくれにし後はさすがにもたなし
さうしかりけむ古跡をゆきかへりつゝ残ることなりしこそ
いかにしられ露むすぶゆふべにすゞしきかゝれ如てよろしき
みをもとへ夕へかゝる所もとめられかゝる古跡をたづねて
されはてきへかの露の真葛原誰かはしらむ神は　しりしん
孟蘭盆の夕へ霊まつる秋葉もたえし今一とせかの涧かくれ
て物のかなし　若の露秋かなしき故人非之独り秋思多ゐ
ひとり一笑を偷む市井のさか残燈欲消えし昔ゐかの

らぬもおぼえねばおかへ帰りて
金風夜坐徒懐古　玉露秋成独薦新　西昕
素月陽雲靈根夕　悲歎帝上易穂か
さへの夜残月のかへ小秋ありて風よ涌らくかなのよのまた
○
夕道子かぞへつゝひ帰りて
ましてあかれわがかや秋のある
ときなへかしこに
かくしこさらへ秋桐の一葉

○追悼　　沙门寂栄

雲晴残月影　草露感時深
旅雁驚秋夢　一声度遠岑

○和

松下風霜旧　幽蘭秋露深
月残孤雁落　愁眼碧雲岑　坦軒　國恒

三年始免抱懐中　可耐慈堂罔極空
悲涙無従不何若　生留一来致林宗

和

素月冷雲愁眼中　紅蕉踈槿故園空
豈忘康存断機昔　海江義方教厳室
勝氏

慈寧随化遂天然　義烈有成謝世縁
唯
泣歛衣衾慕笑語　空陳几案哭靈前
紫雲蓄苞半輪月　碧水朝開九品蓮

非斎色容終定相　宗祠致敬為心塗

和

納去納来任自然　霊臺潔絶六塵縁

暁雲同夢伴香吹　落月窓光残枕前

静閑八音集玉樹　新留半空紫金蓮

画閣錦帳靖風裡　一行貞心十吉全

咏

淑室大姉往生のゆふへときゝてせ往郷しゆく

尼妙円

わかれとて尼君の露の身をきえぬる（野辺）おくる袖

往生講むすひしとこそも行く人のかねのこゑにそ袖

つゆ結ひし世を一世あひみなきかなしさをおもひやられて

尼真瑩

深き露のおきふしむすひしときく世にあらはれて今のうきよ

二七日にあたる夜夏中にさとる御経を開題供養せられ

当寺にて瑞雲上人諷誦文をかゝれしなかに述べらるゝ

しつかにしくるゝ雨もきゝ隠れとのゝしるまゝに西向し遊
二ころあまり残しおりぬ彼の便ものゝ哀を添て谷留半庵
の縁をむすひけれ

尼清讃

夜すからの法のめくみに思ひおきぬる身も済ふとかゝれ

護國天麟

昨夢先觀托質園　慇懃告夢唱般元
眼中光射夢中日　夢裡儼然奉裹尊

四色菴數會遁夢　一声禪號梦堤原
看来身夢無相夢　誰不信身非夢堤

和

風除塵夢笑空園　眺却死生覚本元
宝地遊神藤花曉　凉霄入夢訪陀尊
恩風霧白殘孤嶺　別路露橋湿九原
月閣鳴鶯雲隠九　古林涙暗木犀魂

朝日亭章

正命友終齡八十　蓮堂露冷惆秋辰
情遍長弟讀般若　寿増守貞祈此辰
風哭夜墓濺泣血　月明淨去結前因
神遊昨夢覺槐夢　天宮蓮華成佛人

和

悦聽淚落一声雁　塵夢醒殘雛再晨
獨見長山慕遠水　與誰月夕又花辰
雲墓授手是新冢　蓮界結跏既同因

白社風清蘭桂露　臺床空對畫圖人

嗽石子

蘭折露風枯此堂　堆中葉散尚流芳
春來献壽秋濺淚　耐感人間夢一場
今茲上元日祝八十齡　献章故旬中及于此

和

孤伴蝶魂睡草堂　桂風松菖織餘芳
上元佳會中元根　悲喜兩般一夢場

同氏重能は海にて蔵武影前まかくれて
一もとは海の波の上につゝかれし世をはて人たち侍りけるか
哀なり
おもふへてちるさき秋の嵐ふく風にて世の中はかなき袖ぬれ〳〵
又なおかたの書なき人に忘れかたき身もへん人の涙哀さとそ
うきにも侍る様なり
わすれまし同し涙の紅も今一しほかゝるおもかけの涙
うき身

わすれかたき形見の庭のさくらは風の前の月を独りなかめて
或人のまよひ
松原の緑さき檜の枝の風いかにもよくしれて袖ぬらしけん
哀なり
たちまちやあはれとそ世の夢の一とせはかなき袖の袂
母堂のおもひは此世のさかりなき侍らて
奥基
このめよのさかりを見まくほしき事やはるはかなき木の下にそ
かゝる

あはれはまことにはかなき露とも雲ともいはん時なりけり思ひしらるゝ
かなし
秋風にさそはれし露のきえはてゝ残るはかなきやどの庵も
夜な夜なにあへぬ袖への涙添てしほれ秋の上の露

○

癸卯年の六日　郭公かくれさせ給ひしよし聞しはおもひの
夜さへこそ世の中も古郷の露もまことにかはる枝葉のおもひや
もとめつゝ待ちし母の喪に服しへ秋に露かゝるらんや
すゝしさに霞門のうちも今のこゝろの中に猶しれへぬる

雁の作に来てこそ聞まかりしかば紅涙を袖にしぼりて待つ
のこりおしさてのみ宝算の万歳をこそ祝しまゐらせしか
今朝はあはれのいりゆくらん
尊霊決定澄大菩提と霊前にまゐらせ猶ことにぞ待たし
縁ありける上人かくし　惟ある院　無念院　はじめとてもあまたはべらふ
まことにもつらきはおもひ定めがたし
文のうちに後生の思ひを深めてこそ世の中に残る　あまりおもひしらるゝや
御よはひ二十あまりにて世をはやくさられさせ給ふ御時の

みるもとならふほどよりせなりしまことにして一夜秋の雨
いかに風世な雨ゆかしてゝとこゝに人あらくも御のこり
そなたさまのみなはにさそひやのおもひい君の寿くち
かゝるためしいつのよもつねのまゝにはなしとそん
いかにせん風のみなかしまのなかりしはなのきよきあはれ世を

追テ挽淑大儒人

凉霄金界夢　沖宇觀
風尽不相逢　雖遂蓮臺果　猶傷薤露晞

清秋窺色相　皓月照天機　夫有無量寿
綿々御徳輝

和

可恨人間世　死生與秋違　只愁腸將割
噫泣血何歸　昨恐聆咳指　今懐示断機
此庭秋露何　夜月獨流輝
先妣の月忌あらかねのしゝ香と薫りしすゑよて
樹窓殘夢覺兮　孤雁悲鳴遮断雲

法印三教従一勝　源康吏証對　薫

同しく露武人のわかれのそてにしほるらん老のなみた

日数ふる袖の涙のなかにこそ月人わかしいつまてや　ぬれ

冬しも

おきてゆく代のしるへに月かけにあはれしらるゝ袖の露

大橋とよふ橋あらはれて

君のこ宿あとさへ秋は袖の露

まひ侍りしかは

かくてなかれ庭の松むし

○曼陀羅寺の上人　雄範　とふらひ侍りて

風さそふをかたの萩の夕露はさらにはかなき秋のあはれし

面しけれはよみ侍る

めくりきぬ秋の梢のちるにつけ露を袖にそかけてこそ

月忌ゆの夕顔良宜西堂とふらひ来り秋水のつゝ

袂のあはれ念仏してものゝふにかうとそ申しけり

うちてよるとむかしよしみて

おもひやれちゞの露のした紫ちりゆくかたの秋の夕くれ
ときこへしおりしも雨ふりてものことにあはれなりし
ましておもひつけまへる
かしおへぬ秋の袂をしほりつゝなみだひまなき秋の村雨
同しく孫野華山子追善の志とかんし侍れとて

不奈秋風々樹根　北堂遼矣指孫枝
萩花帯涙尚含砌　蛩韻催哀共啼篇
恩恵畢衣残手沢　巌蔵遺筆認心規
毫芒未報々何処　追慕無由更寄悲

今とし被恵手自製之暑衣手沢猶新故而中及此

和

山川花去一秋恨　千歳無由梧桐枝
空送砌蛩蘭晩花　徒迎寒一人菊慈篇
恩衣襲涙沾双袖　走月残芝浸一規
更看哀荷残露晩　西風惨々葉声悲

悦詞

八十遐齢尽命涯　終焉端正念修因（治断　楚石）
方知上品往生主　使是西方極楽人

又

西風吹起訣離涙　易贊慈堂七月秋
追遠頓終純孝礼　呑声泣血至誠憂
縁伱九品蓮臺座　頓洗八功徳水舟
七十古稀潤寧蓋　一任景暮更無体

和

倏忽一風秋露涯　月池影砕竟無因
浄華臺上自然楽　花性吟残昔下身

又

行雲行雨照川根　独坐可撑心上秋
乱吹葉飛空絶使　静霄風落更残夢
輪輪示去菩提轄　撃揖宣当般若舟
円覚人間塵裡夢　芳城残亦何時休

○八月十六日個寂儒子子をと喪しそめさうるらしか

かしこみぬまよしさ待りてかつらくしられ

槿花露落残朝足　松樹烟朦咽夜風

何欤東門無子語　鍾情追憂涙忽々

我袖の露のしかハりぬるをまたはてもの哉　脱近の村雨

儒子かくもかずくしく終ありしよるのなへぬ

へあさ紅の葉をはれなりけれ

長月節の大悲満七々忌辰佛事いとなみけり

一周難川澄氏子　菓山

居諸荏苒歳華頻　忽遇今朝七七辰

秋風雨綵日露濺　泫涎涙洒顆天真

和

花飛鳥別断腸頻　況又秋風落葉辰

愁絶九原一堆上　知乎夢現両非真

いそぐ行以波あハ為しく夜衣ぬきつされ世の

なかりしもかれしいとまぬれまされ袂をおさへてく

たまくらのかしきりの露ゆるみ杜人下　秋の袖哉

八月十かの比月よにゝなれくもなきしかるに 紫のくも
きえしく瑞㒵あみ弟なるかな 深川菴のあつさ弟のまゝ
いまもし桐遶上秋色 裏芸詰明月中とな
き頌 恵瑳禅師すしてまゝ折ふしの頌をのこしあちらえひ
己ヵ悲哉人をきしゝ知る縁ぎ人の愁哉 謝ゐのり
更みあのゝ線う哉わん 深田某迎り比 紅女のうらしらすよ
希の御別もの月しんゆうちかげまて 三人の
桂光もしつゝかめゝふぢぬ

清風松下月　白露草堂秋
詰尽寒螢泣　古精重幾愁
夜寒露をはきそふ秋の涙とぬるゝ袖の月影
九月はなかりぬ重陽の節にも園中秋地の音もたえず
いとゝ悲しさもかゝり出ハ蕭の葉れ人もなく
て色れ萩の風吹ありて宜ふ丁は声あはれなれ
後しら十三夜の月待るまれも涙うちかりくる人
なれ秋の中くもれやうかきへまさりなかうれなき情なかりや

竹篙秋花叢々　輪影半満飛碧霄

霜後風寒轉無酒　爐辺唯有落紅焼

○先妣追福の為に念仏の本尊長一尺立像備中法印運慶の作也

其の宝龕をも新たに造進しまいらせ七十四十夜

の結願にあたりて供養し侍りし附高信推まいらす

すゝめとて

萬籟声休江水平　半空破曉緑雲生　岸頭鉄

樹小春雪　一点梅花満界清

さても兎烏しばしば小走り秋の露のあはれにかゝやぎ

おもふにつけても名残ひとへに卒哭忌の辰にぞなりぬ

光陰のとゞまらざる事かなしさあはれさ後のつとめに

かはらず仏事をいとなみ侍る事ありしに浄の残

あたて一瓣の香をたき侍るに十月

寒月影残横曉嶺

凍雲色冷上香臺

徒逝琴屋又追夢

涙眼根肩雪裡梅

其真影ハ九年さきより自らかきてうつしおきし
ものなりとこの度ハ景陽の竜禅師に請ふて
賛詞をかかせける其詞に曰 序句略之

維心維徳 玉温雪清 有禮有義
蘭馥松貞 恒修浄業 克全其誠
培植優因 能奉再生 夢彼楽国
眺此晦坑 仏陀接取 薩埵来迎
専念不廃 安祥吉行 霜露何限
浄穢甚乎 女流翻楚 人世法程

正徳三季小春念二

勅住妙心 賜紫沙門泰龍賛

○母の往生のさまを或上人のかたりけるをきゝて哀れ
しかれは一巻の記録をつらねて白紙にかきて
つけ侍りし

○いまや心も深し紫の雲はむかへにたちまちいてむ

○かくあるによりて石ばしるみなかみは池もたえせざらん
さかへさかえむあまりよて田の鶴も千とせのよはひをかたらひ
いはほとなりて庭にある竹のこゑにもなびき[illegible]
木立もしげらぬおのづから神とせあまりの春秋を
さへこうすらさもあさましれねどの長康なるの日へしく何
万葉の昔にもすぐるとも何のをきまよにはかこれる
とがなりといへなきそもしろしらずすみとそぬ世の中
何の[illegible]執しておもれの数なれされぬしらぬのあさ

むけく鏡のかけまなしく唐の世代をまなびんや我等
後まつおもひとくくに一本かしかしつ[illegible]くの[illegible]
むかしも今は耳にとまる[illegible]松の[illegible]
ありし竹花鳥声のこのまはりをひくらし世にもう
しらぬ待ちなきをいてとくいのかしられのさかり
月もいふし時をうつあきら縁ある人のめでたうた
夜の頭をかき一首かきあつめてもとにのこれあれ
とて

大かたの月もしられいくよへぬらはしれ　思ひ入けり

○園の右府御嗣封の後いくほとなくかくれさせましまし
けれはあさ御枢上りいとせましくなりぬ年ころ
住へまいりせし人の御こと思ひて侍ちくはかなく
のちはかなしき事か

うれ山まつかけ夢の上にあはれん君かの後の
はるのわかれ

○圓覚院黄門家遁させ給ひし後よみてまゐらせし
藤原輔子君　瑞祥院

常なきものゝかれは秋の武蔵野の草まくらに待侍
霜の下れ

よはなれ出別れし出るかけさなれの月なかしまくらく
きなりかけさなりけれましく後の春人ゝなるか
我身にあるの世ましくなれぬ花とみるぬ常
けさ思ふくやしてとよみつさせすやはりけん

○志水法師山家の名残まかり
年寄れ山をいとさも春の後のかれは松を宿かり
うつれく

○前報恩継誉湛澄上人　正徳二年壬辰二月晦
みあておくへ座化しあまへ

念仏奇特集　訂正

右自序ハ生死両般浪間入弥陀悲海中の句に依て
自ら此書を作り給ふ往生の事を伝へ聞て作り給ふも此
書をもて流て年を経ぬれはしかも法談今は
えにしの浦のもしほ草かきのこし給ひし筆の跡
幾千歳の跡なく成ぬれて各留半座の結縁なれ
今はた清けれは
見すてゝ弥陀連の露の身を厭へるの
後の事は

右の像ハ昔日東都假梅の時東叡山に参りし
に越後国分寺元禄二年十月両辟両歴に震して
大破東西十八間南北十四間宝塔三重其他堂舎仏像ともに炎上
せしを勧進の沙門貫通僧都貫首の命に依て啓
し知識を得て勧縁のしるしに結縁し侍り
し其影像をとゝめて箱に置し頃日見出し
むかし悲しく三十余年の年月一夜の夢のほと
こゝろにしゆかれこゝに結んて侍る

日本政府図書

越後に縁し人々に聞し仏像寺院着何に
おちず再無何りしとそ

図書局文庫
浅草文庫

国立公文書館
National Archives of Japan